

# 「ただけない」話

## — その2 —

### 消費生活アドバイザー 赤城 由紀

ある森の中の施設で会議をした  
ときのことです。

お昼に出していただいたお茶が、  
カルキ臭の強いもので、飲むのを  
ためらってしまいました。

そこで、会議内容にもいざさか  
関係あることだと思い、「先ほどお  
茶を入れていただいておいて、失  
礼かとは存じますが」と前置きし  
た上で、感想を述べさせていた  
きました。

「都市に住む者にとっては特に、  
森で飲む水というのはとても美味  
しいという期待があります。折角  
こういったところに来て、塩素臭の  
強い水を口にするというのはちょ  
っと残念です」

するとその管理をしている方  
のお一人が、「この水は水道水で  
すから、わき水や地下水を使っ  
ているわけではないんです」と返  
してきました。

「NHKの放送局ではなくてです  
ね」と説明を加えようとするこ  
と、さらに、「水道水はきちんと厚生省  
の基準通りの塩素量で消毒をして  
います。必要以上に入れていない  
ということはありませんので安全で

す」と加えてきました。

他の方々も、「少し水を出して  
おけば、塩素は気にならなくなり  
ますよ。先ほどは急いでいたから  
でしょう」「塩素を入れた途端だ  
ったのかも知れないですね」と、  
口々に私をなだめるようにおし  
やいました。

私は出されたお茶にケチをつけ  
たかったわけでは、もちろんあり  
ません。森の持つ浄化力を学ぶ場  
としてのあり方、木炭の持つ力を  
知る機会の提供、ペットボトルな  
どのゴミを出さないための方策な  
どに派生していく問題として、も  
う少し言葉を足したかったのだ  
が、半分呆れ、半分がっかりして、  
それ以上ものを言う元気がなくな  
ってしまい、話はそこで終わりに  
なりました。

NHKの出している「放送研究  
と調査」という雑誌の五月号に  
面白い調査結果が出ていて、色  
々な組織について、「どちらか  
かといえは信頼している」「ど  
ちらかかといえは信頼してない」  
の二者択一で質問をしています。  
NHKについて



## 赤城 由紀（あかぎ ゆき）さん

札幌市生まれ。  
北海道大学文学部行動科学科卒業後、  
コピーライター、短大研究員を経て、  
現在、シンクタンク外部協力研究員を  
勤める。消費生活アドバイザー。北海  
道女子短期大学、光塩学園女子短期大  
学非常勤講師

は八割の人が「どちらかといえば信頼している」と回答しており、胸を張って調査結果を公表できる信頼性を獲得しています。

ところが、「国会」や「政府」の信頼性となると、「どちらかという」と信頼していないという人がいずれも八割弱を占めているのです。つまり、政府が「大丈夫だ」と言ったところで、「政府が大丈夫だと言うなら安心だ」と思う人は二割程度しかいないことになりま

す。  
ダイオキシンの、環境ホルモン、電磁波など目に見えない不安が押し寄せ、厚生省に限らず、お役所の定めた基準がどんな意味をもっているのか疑問をもたざるを得ない世の中にあつて、「厚生省の基準通りの塩素量だから安全」などという説明が如何に滑稽に聞こえるか、ちょっといただけない答弁であつたと思います。

北海道新聞の調査によると、札幌市の二十五パーセントの家庭、つまり四世帯に一世帯は既に浄水器を付けています。ミネラルウォ

ーターを飲んでいるという家庭も二十パーセントに達しています。

これは結構すごい数字だと思います。それだけ水道水の味や安全性に、不満や不安を抱いている人が多いということでしょう。

浄水器は、性能や値段の異なるものがたくさん出ています。

中には効果のないものもあり、また、きちんとした管理を怠るとかえって恐ろしい水を作り出してしまふ可能性もあるので、問題がないとは言えません。浄水器は悪質商法の商品としても有名です。

それでも、浄水器を付けたり水を買って求めたくなるような、消費者の不安を駆り立てる情報は氾濫しています。塩素が作り出すトリハロメタンには発癌性があると言われると心配になります。クリプトスポリジウムなどという病原性原虫も気になるところです。東京の大学に行くようになってからアトピー症状が治ったという学生がいて、よく話を聞いてみると寮には浄水器が付いているということでした。「都会の水が合ったのね」などと笑って笑っていたのですが、



考えさせられる話です。

我が家も浄水器を付けて五年ほどが経ちます。家族の病気をきっかけに健康に関する本を読み漁り、その中で「小さな水」というものに出会って、水への関心を強くしました。病気と名のつくすべてのものを克服できる「マスター・キー」を探し求めた結果、「水」に行き着いた医師を、彼らの著書の中で数人知りました。

人体の成分の六割以上が水でできているのですから、水を良くすれば体も良くなるという考え方は受け入れやすいものがあります。

それじゃあ、浄水器を付けて健康になったのかと聞かれると、そうだといい切ることはできません。健康に良いことも悪いことも試し続けているので、水のお陰を特定することはできないからです。

ただ、塩素臭のある水を口にすることはなくなりまし、何よりも自分で水を管理する意識、水に感謝する意識ができてきたことは良かったと思っています。

農薬や食品添加物も同じことで

すが、水道水は科学物質を用いて処理しているのですから、全く安全だと言いい切ることはできないと思っています。だからといって、危険があるものを使うべきではないという短絡的な話をしようとは思いません。

それを使うことによる効果と残留物や生成物の危険性との兼ね合い、つまりリスク・ベネフィットの問題が重要になるわけですが、そういった議論が消費者のところまで下りてくるということは、今のところほとんどありません。

ただ、これからは変わってくると思います。

例えば水道水に関していえば、「残留塩素を減らすためには、これだけ水道料が高くなりますが、消費者の皆さんはどうしますか」といった問い掛けが行なわれてもいいはず。塩素臭なんか気にしないから今のままでいいという人もいるでしょう。みんなが浄水器を付けていい加減な管理しかできないのであれば、水道代に、オプシオンとして浄水器代と管理費も加えて、高くてもいいからきち

つと管理してもらっシステムを創ろうといった意見もでてくると思います。

たぶん、そういう議論がないままに、消費者の選ぶ道が限られてしまうところに問題があるのだと思います。もちろん情報公開が必要ですし、消費者ももっと勉強をして自己責任能力を身につけなければいけないと感じます。

それが面倒なのであれば、やはり「安全だ」と明言できる人たちの後ろに隠れた様々な人たちの努力に、もう少し感謝すべきなのではないかと思っています。



▲当麻町の水田